

つばさかかんのんれいげんき
壺坂観音靈驗記

〔解説〕

福池桜痴（一説には伊東椿増）が作ったと言われる浄瑠璃に、二世豊澤団平の妻千賀が加筆してできた明治新作浄瑠璃の一つ。団平が作曲し明治十二年十月、大阪大江橋で六世豊竹島太夫が最初に語り、その後、作曲者自身が曲を改めて、明治二十年稲荷彦六座で三世大隅太夫と上演しました。翌二十一年には歌舞伎化もされ、以来、これを上演すれば必ず大入りになるといわれるほどの人気曲となりました。

盲目の座頭の沢市と、彼に献身的につくす妻、お里の夫婦愛の物語。「三つ違いの兄さんと…」という、お里のくどきは有名。ちなみに奈良の壺阪寺もこの浄瑠璃の評判に伴い、辺鄙な場所にもかかわらず、遠方からの参詣人が集まるようになったといえます。

〔あらすじ〕

〈沢市内の段〉座頭の沢市は、洗濯物や賃仕事をして生活を助ける妻のお里と、壺阪寺のほとり、土佐町に細々と暮らしていました。沢市はお里が夫婦になってから三年の間、毎夜七つ過ぎに家にいたことがないので、他に

恋人がいるのではないかと問い詰めます。ところがお里は、沢市の目を治したい一念で、その昔、桓武天皇の眼病がここに立願して平癒したことから、眼病には靈験のあるという壺坂の觀世音に三年越しの祈願をしていたのです。お里に誘われ、夫婦はそろって寺に向かいます。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

沢市内の段

夢が浮世か浮世が夢か、夢てふ里に、住みながら、
住めば住むなる世の中によしあし曳きの大和路や、
壺坂の片辺り土佐町に、沢市といふ座頭あり生れつ
いたる正直の、琴の稽古や三味線の、糸より細き身
代の、薄き煙の営みに、妻のお里は健やかに、夫の手
助け賃仕事つづれさせてふ洗濯や、糊かひものを打
盤の音もかすかの暮らしなり

〜鳥の声、鐘の音さへ身に泌みて、思ひ出すほど、涙
が先へ落ちて流るゝ妹背の川を

「オ、これは〜沢市様。けふはなんと思ふてやら、
三味線出して、よい機嫌ぢやのホ、〜、」

「オ、お里か。そなた、おれが三味線弾くをよい機

嫌に見ゆるかや」

「アイナア」

「ハテナア、おりやモウそんな気ぢやないはいの。

モウ〜気が詰つて、いつそ死んでもものけう」

「エ、」

「イヤサアノ死んでしまうほど、気がふさいでならぬわいなう。コレお里。わしやそなたにチト尋ねた
いことがある。マ、ここへおぢや〜。ハテまあこ
こへおぢやいなう。ほかのこともないが、いつぞ
は聞かう〜と思ふてゐたが、丁度幸ひ。光陰矢の
ごとしとやら、月日の経つはア、はやいものな。ソ
レわが身とおれが、コウ一緒になつてからモウ三年。
稚ない時より許嫁。互に心も知つてゐるになぜ、そ
のやうに隠しやるぞさつぱりと打明けて、云ふてた

も」

とどこやら濁る詞のはし。お里はさらに合点いかず不審ながらに

「コレ沢市様、そりやお前何を云はしやんす。嫁入りしてから三年の間、モほんに／＼露ほども、隠し立てしたことはござんせぬが、それともになんぞまた、お氣に入らぬことあらば、云ふて聞かして下さい。サそれが夫婦ぢやないかいな」

「ム、そう云やればこつちも云はう」

「オ、なんなりとも云はしやんせ」

「オ、云はいでかい。コリヤお里。よう聞けよ。われと夫婦になつて丸三年。每晚七つから先、つひに一度もゐたことがない。ソリヤもうおれはこのような盲目。ことにえらい疱瘡で、モ見る影もない顔形。ど

うでわれの氣に入らぬは無理ならねどほかに思ふ男があらば、さつぱりと打明けて、云ふてくれたらこのやうになんの腹を立てうぞい。尤もわれとおれとは従兄妹同志。もつぱら人の噂にも、アノお里は美しい／＼と、聞く度ごとにおれはもう、よう諦めてゐるほどに、愠氣は決してせぬぞや。コレどうぞ明かして云ふてたも」

と、立派に云へど目に漏るゝ、涙吞込む盲目の、心のうちぞ切なけれ。聞くにお里は身も世もあられず、
縋りついて

「エ、ソリヤ胴欲な沢市様。いかに賤しい私ぢやとて、現在お前を振捨てゝ、ほかに男を持つやうな、そんな女子と思ふてか。ソリヤ聞えぬ／＼エエ聞こえませぬはいな。モ父様や、母様に別れてから伯父様

のお世話になり、お前と一緒に育てられ、三つ違ひの兄さんと、云ふて暮してゐるうちに、情けなやこなさんは、生れもつかぬ疱瘡で、眼かいの見えぬその上に、貧苦にせまれどなんのその、一旦殿御の沢市様。たとへ火の中水の底、未来までも夫婦ぢやと、

思ふばかりかコレ申しお前のお目をなおさんとこの壺坂の観音様へ、明けの七つの鐘を聞き、そつと抜け出でたゞ一人、山路いとはず三年越し。せつなる願ひに御利生のないとはいかなる報ひぞや。観音様も聞こえぬと、今も今とて恨んでゐた、わしの心も知らずして、ほかに男があるやうに、今のお前の一言が、私は腹が立つはいの」

と、口説き立てたる貞節の涙の、色ぞ誠なり。沢市涙にくれながら

「オ、過分なぞや女房ども。さうそなたが一心の、据つた上は御仏の、枯れたる木にも花が咲くとやら、見えぬこの目は枯れたる木。ア、どうぞ花がさかしたいな。と云ふたところが、罪の深いこの身の上。せめて未来を」

「エ、」

「イヤサアノ女房ども。手を引いてたもいざ〜」
と、云ふに嬉しく女房が、身拵へさへそこ〜に、労はり渡す細杖の、細き心も細からぬ、誓ひは深き壺坂の御寺を、さして

しんぱんうたざいもん

新版歌祭文

〔解説〕

安永九年（一七八〇）九月竹本座初演。作は近松半二（一七二八〜一七八六）です。お染久松の心中を扱った「袂の白しぼり」（一七一一）や「染模様妹背門松」から登場人物、筋書き、有名な文句までもそのまま使った「お染久松物」の決定版で、上中下の三巻からなっています。中でも上の巻「野崎村の段」は度々上演され、段切りの旋律は多くの人に知られています。

〔あらすじ〕〈野崎村の段〉油屋の丁稚久松は、集金した金を贖金とすり替えられ、野崎村の養父久作の元へ返されます。手代の小助が金を立て替えろ、と迫るので、久作は金を渡して追いつきました。久作は重病で盲目となった後妻、そしてその連れ子のお光と暮らしていますが、ゆくゆくは久松とお光を夫婦にしようと思っっていました。久松が戻ったので、祝言をあげさせようとお光に支度をさせているところへ、かねてから久松と恋仲の油屋の娘お染が、跡を追って訪ねてきます。心中をも覚悟する二人に久作は意見して別れることを納得させますが、お光は二人の気持ちは揺るがないと悟り、自分が尼僧になることで、二人を一緒にさせようとしています。その様子を外で聞いていた油屋の後家は、前に久作が渡した金を尼への布施として差し出します。世間を憚り、久松は駕籠、油屋母娘は舟で大坂へと戻っていくのでした。

野崎村の段

年の内に春を迎へて初梅の、花も時知る野崎村、

久作といふ小百姓、せわしき中に女房は、万事限りの隔病、娘おみつが介抱も心一杯二親に、孝行白の石よりも堅い行儀の棲外れ、在所に惜しき育ちかや。

冬編笠も燻り三味線、つぼもすまたの弾き語り

「ご評判の繁太夫節、本は上下綴じ本で六文、お夏清十郎の道行く、あづまからげのかいしよなき、

こんな形でも五里十里」

「通らしやれ、母様の煩ひで三味線も耳には入らぬ。

手の暇がない、通つて下され」

「清十郎涙ぐみ、お夏が手を取り顔打ち眺め、同じ恋とはいひながら、お主の娘を連れて退く、これよ

り上の罪もなし」

「オ、聞きとむない。通りやく」

と言ふ声に、久作は納戸を出で

「大坂で流行る繁太夫節、そなたにも聞かしたけれど、病人の氣に構はふ。本など読んで気晴らしや」と、義理ある中も子を思ふ恵みは厚き古合羽の、煙草入れからこつてこて銭取り出して

「ドレ一冊買ひませふ。なんぢや『お夏清十郎、道行恋の濡草鞋』コレ見や、このお夏は手代と懇ろして、姫路を駆け落ちする道行。同じ娘でも世は様々、わづか三里の大坂へ芝居一つ見にも行かず、今度の大病から目の見へぬ婆の介抱。達者な俺が食ひ物まで、その様に氣を付けてたもる孝行娘。もし疲れても出よふかと、おりやそれを案じるわいのふ。したが百日と限りのある婆が大病、案じるも無理ではない、

ガ玄庵殿の加減の薬で、今朝から末の椀蓋に重湯が二杯通つた。見かけによらぬ巧者な医者殿。ヤ幸ひ今日は日和もよし。久松が親方殿へ歳暮の札に往て来る程に、随分婆に気を付きや」

と、云ひつゝ脚絆草鞋がけ、紐引き締むれば

「才、父様とした事が、この短い日にモウ昼過ぎ。明日の事になさんせいで」

「何のいやい。年こそ寄つたれこの足に覚えがある。

一時三里犬走り、日暮までには戻つて来る。歳暮の祝儀は、コレ／＼この藁苞、山の芋は鰻になる。久松が年が明けたらば、われは又お内儀になる。それ楽しみによふ留守せい。ドリヤ往て来ふ」

と身拵へ。藁苞肩に

「ヤ、ゑいとこな」

表へ出でしが立止まり

「とりわけ今年は早ふ咲いたこの梅、何よりかよりよい土産」

と、春待ち顔に咲く花を、手折つて苞に一技を、添へてひよか／＼野崎村、跡に見なして出でて行く。影見送りて久松が事のみ思ひ兔や角と、胸に一ぱい半分の、水量り込む薬鍋、一へぎ入れる生姜より、辛い面つき久三の小助、久松引き連れ入口から

「久作内にゐやるか」

と、づゝと這入ればおみつは嬉しく

「才、久松様、よふマア戻つて下さんした。定めてあなたは送りのお方。お茶よ煙草」

と嬉しさに、立つたりゐたり気もそゞろ

「エ、やかましいわい。うそ穢い在所の茶呑みには来ぬわい。コリヤ追従せずと聞いて置けよ。この久松めが親方の銀、一貫五百匁、お山狂いにちよるま

かしたによつて、今日連れて来たはな、久作と三つ鉄輪で詮議するのぢや。親父を出せ、出せくく

く

と辰巳上がり。身の誤りに久松が差し俯むひて詞さへ、ないには『もしや』と思ひながら

「お腹立ちはお道理ながら、何のマア久松さんに限つて、よもやそふした事はあるまい。定めてこれはなんぞの間違ひ。サ覚えがなくなはないといふ、ツイ言訳をして下さんせいな」

「ハ、べるはくく、喋るはく。コリヤヤイ、頭こそ前髪なれ、イヤモウそのさらす事の素早さ。朋輩には辞宜なしに、取つて置きのお娘まで、へへ、この跡は云はずにこます。エ、小倉の屋敷へ受取に往た為替の銀、御役人から改めて渡つたは正真。内へ戻つて明けたところが、わやひんの胴脈ぢや。コ

リヤてつきり道の間で、ナ、ソレ、擦り替へた、品玉の太夫、早咲久松、早久でござい。ハアトヤカラく

く。何ぢやいくく、白眼剥くは無念なか、

無念なら銀立つるか、あるまいがな。サア久作はどこにある。出さらずば引き出さふ」

と、駆け入る袂を久松引き止め

「成程、銀を擦り替へられたは皆私が不調法。身の明りの立つ迄は、在所へ往けと、後室様の結構な御了簡。それをそなたが」

「ヤイくく、何抜かずぞい。ソリヤわれが勝手了簡の聞き損ひ。俺には又この詮議仕抜いて来いと、内証で後家御の言ひ付け。ぢやによつてめつきしやつきするのぢやい。ひんごめ出され」

と大声をおみつが押さへて

「コレ申し、御尤もでござんすけれど、奥の病人に

よい事がましよう聞かしましては病気の障り。モそつと静かに」

「イヤ高ふ云ふのぢや〜。これ程喚くに聞き耳潰すは、ハ、アこりや親父もぐるの仕事ぢやな。イエ父様はあなたの方へ、歳暮の札に往かれました。どうして道が違つた事」

「何ぢや、大坂へ往たが定なら否ながら道で逢う筈。そんなてれんぬかすない。ドレもふ家捜しと出かけざるまい、邪魔ひろぐな」

とおみつを引き退け、取り付く久松

「面倒な」

と、踏むやら蹴るやら無法の打擲、詮方もなき折らに。道引つ返しいつきせき戻る久作駆け入つて、小助を引き退け突き飛ばし

「コリヤ留守の間へ来てわつぱさつぱ。様子によつ

て了簡せぬぞ」

「オ、よふ戻つて下さんした。最前から久松様をな」
「オ、よいてや。久作が戻るからは娘もじつと落ちて着け」

と納める程なほ業腹煮やし

「大枚の銀引き負ひしたそのばりめ、詮議に来た小助は親方の代り、それを又わりや何で投げたのぢや」

「これは迷惑な。ひばり骨見る様な手で血気なこなた投げたのではない。怪我のはづみ。出端れの曲り途で道が逢ふて、留守の間へ大坂から息子が来たぞやと、若い者どもが知らしてくれたで、行き戻り五

六里を助つた徳庵堤。引返して戻つたが、そんなら何か、その引き負ひで、久松は戻つたのか。ア、それ聞いてマア落ち着いた。マア〜何かは差し置いて、朋輩衆のお世話であらふと、蔭ながら言ふてばつか

りゐますわいの。寒い時分によふ連れ立つて来て下さつたなふ。ソレおみつよ、茶なと汲まんかい」

「コリヤ納めなく、納めおるない。わりやマア夢に見たこともあるまいが、一貫五百匁といふ銀高、子の科は親にかゝる。銀立つるか、但しは又願はふか。

どぶぢやい／＼／＼／＼／＼／＼」

「ハテよいわいの。その様に息精張るは大きな毒。

とかく人間は心長う持つのが薬ぢや。ヲその薬で思ひ出した。土産にせふと思ふたこの山の芋をとろゝにして、出来合ひの麦飯を進ぜふかい」

「エ、置けやい／＼、見せかけばかりの正直倒し。

イヤ麦飯のとろゝのと、ぬらくらとは抜けさせぬ。

エ、あんだら臭い」

と蹴散らす藁苞、破れてぐはらりと出る丁銀

「ソレ久松が引き負ひの銀、渡したからは言い分あ

るまい。とつとゝ持つて去なしやれ」

と、聞いておみつも久松も思ひがけなき驚きに、小助もぎよつとしながらも、包み改め

「コリヤ正真ぢや／＼。吹きや飛ぶ様な内のさまで、泥亀三つで一貫五百匁。テモ出難い所からよふ出たな。銀受け取るからは言い分ないわい」

「ヲ、そつちに言分がなふても、こつちにグツと言分がある、と言ふも古い物ぢや。これまでお世話になつた親方様、御恩こそあれ恨みはなけれど、人に欺され取られた銀、引き負ひの悪遣ひのと、無い名を付けて貰ふてはどふも世間が済まぬ。と言ふて無理隙取るではない。親が暫く預つて置く程に、この通り言ふたがよい。モウ二十年俺が若いと、わごりよにはぐつと馳走もあれど、ア、入らざる殺生。サア／＼早ふ去んだらよかる」

と言はれてどふやら底気味悪く

「ハテ銀の出入りさへ済んでしまや外の事はお構ひないわい。ドリヤさらば御暇申さふ」

と打違取り出し、捻ぢ込み押し込み

「ハ、ア命冥加な一貫五百匁、内へ往んで出したところ、墓になつてあやせまいか」

「ハテ仇口を聞かずとも、足元の明い中」

「ヲ、去ないぢや〜〜。銀こそは主の物。何のその俺が手に、俺がコウかたげて、俺が足で、俺が歩いて、俺が体で、俺が去ぬるに、ぐつとも言分ない筈ぢや」

と、へらず口して、とつぱ門口柱で頭

「ア痛し」

小助は足早に、大坂の方へ立ち帰る。おみつは親の気をかねて、答へなければ久松擦り寄り

「この身の手詰めは遁れても、この御暮らしで余程の銀。跡でお前の御難義には」

「ハテ俺ぢやとて相応のかくまひはせまいものか。

始末したためたあの銀は、黒谷の方丈へ上げる冥加銀。氣遣ひしやんな。まんざらあればかりでもないわいの。改めて云ふではなけれど、末はわが身と一つにする約束で、このおみつは婆が連れ子。あれも

否でもないそふなり、折もあらば親方殿へ暇の事を願はうと思つてゐたが、これがほんのもつけ重宝、もふ大坂へ去なしはせぬ。早却なれど日柄もよし、今日祝言の盃さすぞ。なんとおみつよ嬉しいかく〜。

われらは又頭を丸め参り下向に打ちかゝらふと、頼み寺へ願ふて袈裟も衣もちやんと請けておいたてや。幸ひ餅はついてあり、酒も組重も、正月前で用意はしてある。サア〜早ふ拵や」

と、藪から棒を突つかけた、親の詞に吐胸の久松。知らぬ娘は嬉しいやら、又恥づかしき殿設け、顔は上気の茜裏袂くはへるおぼこさを見るにつけても今更に否応ならぬ親の前、急に思案も出の口の壁にいの字を垣一重。裏の病架に咳嗽く声

「ホンニこちらのことに取込んで、定めて婆が淋しからふ。久しぶりで久松にも逢はして、この事を聞かしたら薬より効目がよい。ハテ俯いてばかりゐずと、おみつ、鱈も刻んでおけ。久松おぢや」と、先に立ち悦び勇む親の気を、知つて破らぬ間に合ひ紙、襖

引き立て、入りにける。後に娘は、気もいそぐ、

「日頃の願ひが叶ふたも、天神様や観音様、第一は

親のお蔭。エ、こんな事なら今朝あたり、髪も結ふて置かふもの。鉄漿の付け様挨拶もどふ言ふてよからやら」

覚束鱈拵へも、祝ふ大根の友白髪、末菜刀と気も勇み、手元も軽ふちよきちよき、ちよき、切つても、切れぬ恋衣や、元の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、あとを慕うて野崎村堤伝ひにやうやうと、梅を目当てに軒のつま。供のおよしが声高に

「もうし御寮人様。かの人に逢はふばかり、寒い時分の野崎参り。今船の上り場で、教へてもらうた目印のこの梅。大方ここでござりませうぞえ」

「アアコレもそつと静かにいやいなう。久松に逢ひたさに、来ごとは来ても在所の事、日立つては気の毒。そなたは船へサ早ふぐ」

と追ひやり追ひやり

「物もふお頼みもうしませふ」

といふもこはこは暖簾越し

「百姓のうちへ改まつた。用があるなら這入らしやんせ」

「ハイハイ卒爾ながら久作様はうち方でござんすかえ。さやうなら大坂から久松といふ人が今日戻つて見えた筈。ちよつと逢はして下さんせ」

といふ詞つき姿かたち

「常々聞いた油屋のさてはお染」

と愠気の初物胸はもやもやかき交ぜ鱈俎押しやり、

戸口に立寄り

「見れば見るほど美しい。あた可愛らしいその顔で、久松様に逢はしてくれ。オホそんなお方はこちや知らぬ。よそを尋ねて見やしやんせ阿呆らしい」

と腹立ち声。心付かねば

「ホンニマア、なんぞ土産と思つても急な事、コレく女子衆、さもしけれどもこれなりと」

と夢にもそれと白玉か露を袱紗に包のまま、差出せば

「こりやなんぢやえ。大所の御寮人様、様々と言はれても心が至らぬ置かしやんせ。在所の女と悔つてか、欲しくばお前にエ、やるわいな」

とやら腹立ちに門口へほればほどけてばらばらと、草にも露銀芥子人形、微塵に香箱割れ出した。中へつかつか親子連、出てくる久作

「アどうぢやどうぢや鱈は出来たであらう。さて祝言のこと婆が聞いてきついで悦びぢや、が年は寄るまゝのもの。さつきのやつさもつさで、取りのぼしたか頭痛もする。ア、い、い、肩がつかへて来た。橙の数は争はれぬものぢやわいの」

「さやうならそろそろ私が揉んで上げませうか」

「ソリヤ久松忝い。老いては子に随へぢや。孝行にかたみ恨みのないやうに、コレおみつよ三里をすゑてくれ」

「アイアイ、そんなら風の来ぬやうに」

となにがな表へ当り眼、門の戸びつしやりさしもぐさ

「サア／＼親子とて遠慮はない。もぐさも疝瘡も大掴みにやつてくれ」

「アイ／＼コリヤマアきつうつかへてござりますぞえ」

「さうであらうさうであらう。ついでに七九もやつたも。オットこたへるぞこたへるぞ」

「サア父様すゑますぞえ」

「アツアツアア、アアえらいぞえらいぞ。ハ、ハ、ハ、

イヤモウモウあすが日死なうと火葬は止めにして貰

ひませう。丈夫に見えても古家。屋根も根太もこりや一時に割普請ぢや。アツ／＼／＼」

「オオ父様の仰山な。皮切はもうしまゐでござんす。ホンニ風が当ると思や。誰ぢや表を開けたさうな。

締めて参じよ」

と立つを、引止め

「ハテよいわいの。昼中にうつとしい。ノウ久松、久松、久松、コリヤ久松。よそ見してゐずと、しか／＼

と揉まぬかいの」

「サアよそ見はせぬけれど、覗くが悪い。折が悪い、

悪い／＼」

と目顔の仕かた

「や悪いの覗くのと、足に灸こそすゑてゐれ、どこもおみつは覗きはせぬか」

「サアアノ悪いと言ひましたは、確か今日は瘟こう日。それに灸は悪い〜というたのでござります」

「エ、愚痴なことを。このやうに達者なは、ちよこ〜と灸をする作りをする、そこで久作。アツ〜やっぱり熱いわいハ、、、。ムなんぢやわい、わが身達も、達者なやうに、灸でもすゑるのがおいらへの孝行ぢやぞや」

「オ、さうでござんすとも。久松様には振袖の美しい持病があつて、招いたり呼出したり、エ、憎てらしい、あの病ひづらが這入らぬやうに、敷居の上へエ、大きいしてすゑて置きたいわいな」

「アツイ〜おみつ、何するぞい、どうするぞい。そこは頭ぢやがな頭ぢやがなコリヤ、頭に三里があるかい。アアトツトモウ、えらい目に合はしおるわいハ、、、」

「コレおみつ殿。振袖の持病のと色々の耳こすり、はしたない事聞いてはゐぬぞや」

「ホ、変つた事がお気に障つた」

「ホ、障らいぢや」

「コリヤをかしい。その訳聞くぞえ」

「オオいふぞや」

と我を忘れていさかいを、外に聞く身の気の毒さ、振りの肌着に玉の汗。久作ももてあつかひ

「コリヤヤイ、コリヤ肩も足もびり〜するがな、びり〜。まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかひの取越しかい。灸行の代り喧嘩の行司さすのかやい。

二人ながらエ、嗜めたしなめ」

「イエ〜構ふて下さんすな。今のやうな愛想づかしも病づらめが言はしくさるのぢやわいなア」

「なにをいふやらハ、、、モウ〜両方ともおれが

貰ひぢや。ヨ、仲直しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり鉄漿もつけたり、湯もつかふて花嫁御、コリヤ作つて置け」

と打笑ひ無理に納戸へ連れて行く。その間おそしと駈入るお染

「逢ひたかつた」

と久松にすがりつけば

「ア、コレ声が高ふござります。思ひがけないここへはどうして、訳を聞かして聞かして」

と問はれてやう／＼顔を上げ

「訳はそつちに覚えがあらう。わしが事は思ひ切り、山家屋へ嫁入りせいと、残しておきやつたコレこの文。そなたは思ひ切る気でも、私やなんほでもえ切らぬ。あんまり逢ひたさ懐しき。勿体ない事ながら、観音様をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、知ら

ぬ在所も厭ひはせぬ。二人一緒に添はうなら、ままも炊かうし織りつむぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女の道を背けとは、聞へぬわいの胴欲」

と恨みのたけを友禅の、振りの袂に北時雨、晴間はさらになかりけり、曇りがちなる久松も、背撫でさすり声ひそめ

「そのお恨みは聞こへてあれど、十の年から今日が日まで船車にも積まれぬ御恩。仇で返す身のいたづら。冥加のほども恐れければ、委細は文に残したとおり山家屋へござるのが母御へ孝行家のため、よう得心をなされや」

と言へど、答も涙声

「いやぢやいやぢや私やいやぢや。今となつてさう言やるは、これまでわしに隠しやつた、許嫁の娘御

と女夫になりたいたい心ぢやの。せひ山家屋へ行けならば覺悟はとうから極めてゐる」

と用意の剃刀取直せば

「それは短氣」

と久松が止めても、止まらず

「イヤ~~~~、そなたに別れ片時も、なに楽しみに生きてゐよふ。止めずと殺して殺して」

と思ひ詰めたるその風情

「そんならこれほどもうしても、お聞き分けはござりませぬか」

「添はれぬ時は死ぬるといふ、誓紙に嘘がつかれうかいなふ」

「ハアたつてもうせば主殺し。命に代へてそれほどまでに」

「思ふが無理か女房ぢやもの」

「叶はぬ時は私も一緒にお染様」

「久松」

と互ひに手に手を取りかはす、悪縁深き契りかや

始終後に立聞く親

「その思案悪からう」

と、言われて『はつ』と久松お染。騒ぐを押へて

「ア、大事ないく。マア~~~~、下にゐやく。ハテマア下に居やいの。因縁とは言ひながら、和泉の国

石津の御家中、相良丈太夫様といふれここの息子殿。

いささかの事で家が潰れてから、わが身の乳母はそれが妹、その縁で十の年まで、育て上げたこの久作は後の親。草深い在所に置かうより、智恵付けのた

め油屋へ丁稚奉公。それほどまでに成人して商売の

道読み書きまで、人並になつたはコリヤ親方の大恩。

その恩も義理も弁へぬは、これ見や、先に買うたお

夏清十郎の道行本。嫁入りの極つてある、主の娘を

そそのかすとは、道知らずめ、人でなしめ、トサコリ

や清十郎が話ぢや／＼、話ぢやわいの。疾うか

ら意見もしたかつたれど、今のような事があるかと、

それが悲しさ、一日延び、二日延ばしにする間、降つ

て湧いた銀のもめ事。これ云い立てに暇をもらひ、

分けておくのが上分別と思うふから、引き負いの銀

の工面、どのように気張つても高の知れた水呑百姓、

僅かの田地着類着そげ、おみつめが櫛笄まで売り代

なし、やうやう拵へたさつき銀、なさぬ仲でも親

子といふ名があるからは、肉身分けた子も同然、可

愛うなうてなんとせう。コレお染様、ではない、この

本のお夏とやら。清十郎を可愛がつて下さるは、嬉

しいやうで恨めしいわい／＼の。聞いての通りおみ

つめと女夫にするを樂しみに、病苦を堪へて居るア

ノ婆様に、今の様な事聞かしたら、何と命がござり

ませう／＼ぞいの。若い水の出端には、そこらの義

理もへちまの皮と投げやつて、こなさんといつまで

も、添ひ遂げられるゝにしてからが、戸は立てられ

ぬ世上の口ぢやわい。エ、あの久松めは辛抱した女

房を嫌うて、身上のよい油屋の婿になつたは、コレ、

栄耀がしたさぢや皆慾ぢや。人の皮着た畜生めと、

在所は勿論、大坂中に指さされ、人交りがなりませ

うかいの。コレ／＼／＼この道理を聞分けて、思

ひ切つて下され。申しコレ、拝みます／＼わいの。こ

れほどうても返答のないはコリヤ二人ながら不得

心ぢやの」

「ア、勿体ない。実の親にも勝つた御恩、送らぬの

みか苦をかけるも、私が不所存から」

「イヤ／＼そなたの科ではない。みんなこの身の徒らから、親にも身にも代へまいと、思ひ詰めても世の中の義理にはどうも代へられぬ。なるほど思ひ切りませう」

「才、よう御合点なされました。私もふつつり思ひ切り、おみつと祝言致しまする」

「そんならそなたも」

「お前も」

と互に目と、目に知らせ合ふ心の覚悟は、白髪のおとと仁

「アノさつぱりと思ひ切つて、祝言をしてたもるか」

「なんの嘘を申しませふ」

「娘御も今の詞に微塵も違ひはござりませぬか」

「久松の事はこれ限り、私や嫁入をするわいの」

「ヲ、出来た／＼。ア、むくつけない親父めと腹

も立てず、よう聞き入れて下さりました。晩の間の知れぬ婆が命、息のあるうち祝言すんだ、と聞かして下さるが大きな善根。善は急げぢや、今ここで盃さそ。おみつ／＼」

と尻軽に立つて一間を差覗き

「ハテ出ぐすみをしてをるわ。それでは果てぬ」

と手を取つて

「サア／＼マア／＼嫁の座へ直つたり／＼。時に一家一門着のままの祝言に改まつた綿帽子、うつとしかろう取つてやる」

と脱がすはずみに、笄も抜けて惜しげも投げ島田、根よりふつと切髪を、見るに驚く久松お染、久作呆れて

「こりやどうぢや」

といふ口おさへて

「コレ申し父様もお二人様も、何にもいうて下さるすな。最前から何事も残らず聞いてをりました。思ひ切つたといはしやんすは、義理に迫つた表向き。

底の心はお二人ながら、死ぬる覚悟でござんしようがな。サ死ぬる覚悟で居やしやんす、母様の大病。どうぞ命が取りとめたさ。私やもうとんと思ひ切つた。ナ切つて祝うた髪かたち、見て下さんせ」

と両肌を脱いだ下着は白無垢の、首にかけたる五条袷袢。思ひ切つたる目の中に浮かむ涙は水晶の、玉より清き貞心に、今更何と詞さへ涙呑み込み、呑み込んで堪ゆるつらさ久松お染。久作も手を合せ

「なんにもいはぬこの通りぢや、／＼。女夫にしたいばつかりに、そこら辺りに心もつかず、蕾の花を散らして退けたは、皆おれが鈍なから、赦してくれ」

も口のうち、聞こへ憚る忍び泣き

「ア、冥加ない事おつしやります。所詮望みは叶ふまいと思ひのほか祝言の、盃する様になつて、嬉しかつたはたつた半時。無理に私が添はうとすれば、死なしやんすを知りながら、どう盃がなりませうぞいな」

四人の涙八ツの袖。榎並八ケの落し水膝の、堤や越えぬらん。久作涙押拭ひ

「どうやらかうやら合点がいたさうな。さぞ母御様が案じてござらう。大事な娘御確かな者に」

「イヤそれには及びませぬ。母が確かに請け取りました」

と言ひつつ這入れば

「ヤア母様。ハア」

『はつ』とばかりに詞なく差し俯向けば

「コレお染。野崎参りしやつたと聞いてあんまり氣遣ひさ。アイヤ氣慰みによからうと跡追うて来て何事も残らず聞いた。夫婦の衆の親切、おみつ女郎の志。最前からあの表で、私や拝んでばつかりましたわいなう。サア觀音様の御利生で、怪我過ちのなかつた嬉しさ。これから直ぐにお札参り。ホンニこれはさもしい物なれど、御病人への見舞ひの印、僊末ながら」

と詞数、云わず出過ぎぬ杉折を、供の男が差し置けば

「マア〜冥加もないお見舞ひ。戴きまする」と取り上ぐる、手元はづれて取り落とせば、中よりぐわらりと以前の銀

「ヤア先刻に渡したこの銀を」

「ヲ、表向きで受け取ったりや事は済む。改めて尼

御へ布施、せめて娘が冥加ぢやわいなう。言ひ訳が立つからは久松ももとの通り、戻つて目出たう正月しや。取り込みの中長居も無遠慮、娘もおぢや」

と手を引いて、表へ出づれば久作も、門送りして

「これはマア〜何とお札を申しませうやら、お辞儀致すも返つて不躰。せめてものお土産に、折つて置いたこの早咲き。めでたい春を松竹梅とお家も栄え、蓬萊の飾り物。幾久松が御奉公、大事に勤めてこの御恩、忘れぬ証」と差し出だせば

「ヲ、心ありげなこの早咲き。譬へて云へば雨露の恵みを受けぬ室咲きは、萎むも早し香も薄い。盛り春を待てといふ、二人への良い教訓。殊更内に口さがない物もあれば、何かに遠慮せねばならぬ。幸ひ私が乗つて来た、あの駕籠で、コレ久松。そなたは

堤、お染は船。別れ／＼にみぬるのが、世上の補ひ心の遠慮」

「ハイ／＼左様でござりまするとも。お志ぢや、乗つてゐにや」

「娘は船へ」

と親々の、詞に否も言ひ兼ねる、鴛鴦の片羽の片々に別れて二人は乗り移れば

「兄様お健で。お染様、もうおさらば」

と詞まで早や改まるおみつ尼。哀れをよそにみなれ

棹

「船にも積まれぬお主の御恩。親の恵の冥加ない取り分けておみつ殿。かうなりくだるも前の世の定り事と諦めて、お年寄られた親達の介抱頼む」

と云ひさして泣く音伏籠の面ぶせ。船の中にも声上げて

「よしないわし故おみつ様の、縁を切らしたお憎しみ、堪忍して下さいませ」

「ア、わつけもないお染様。浮世離れた尼ぢやもの。そんな心を勿体ない。短気起して下さいな」

「オ、娘が云ふ通り、死んで花実は咲かぬ梅。一本花にならぬ様に、目出たい盛りを見せてくれ。随分達者で」

「ハイ／＼お前も御無事で」

「お袋様もお娘御もおさらば」

「さらば」

「さらば」

さらばも遠ざかる船と、堤は隔たれど縁の引綱一筋に、思ひあうたる恋中も義理の柵情のかせ杭、駕籠に比翼を、引き分くる心々ぞ世なりけり

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。